

教養・基礎科目のカリキュラム改正の効果の検証 －学生の感性を高める関わり－

The inspection of the effect of the curriculum revision of culture / the basic subject
－A relation to make the sensitivity of the student－

赤 沢 昌 子 尾 台 安 子
Masako AKAZAWA Yasuko ODAI

要旨

対人関係の中で表現力に乏しく、表現することを躊躇する学生が年々増加傾向にある。しかし、介護は対人援助職であるため、感性を高め相手を思いやることや相手の思いに気づくことができ、自分自身を振り返ることができなければならない。こうした学生の変化に先んじて、教養・基礎科目においてカリキュラムの改正を2年前に行った。また、教員の関わりを多くしていくための授業展開の工夫をしてきた。これらの取り組みの紹介と取り組んだ内容の効果を検討した。

この2年間の取り組みを検証してみた結果、生き生きと自分を表現できることで学生たちは友達とのつながりを深めたり、学ぶ意欲につながっていった。また、いのちについて考えその尊さに気づき、人に対する思いやりを持つことができるようになった。人はそれぞれであって、個性で自分らしきがあって良いという気づきが、他者をも認め受け入れていくことにつながっていた。

教員の関わりを多くしたことにより、学生の持っている能力、感性を引き出すことにつながり、学生自身の個性に気づき人間関係を円滑にしていくことができたと考える。それにより学生は仲間作りができ、人間関係構築の基礎を形成することになったと考える。

【キーワード】 カリキュラム 感性 学生 教員 関わり

はじめに

介護福祉士養成教育は20年を経て、来年度から大幅な見直しがされた新カリキュラムでスタートを切ろうとしている変動の時代を迎えている。求められる介護福祉士像はまさに専門職として実践力をつけ、人間としての尊厳を支えることができる高い倫理観、対人援助職としてのコミュニケーション技術、チームケアからの連携調整能力、一人でも基本的な対応ができる能力、個別援助の実践力などが求められている。

しかし、現代の学生は、高校までほとんど講義形式な教科が多いためか、自己を表現し主張する体験が欠落しており表現力が乏しいと考える。また、以前より言われている国語力の低下に、さらに拍車をかけるように携帯電話の発達により、礼儀を逸脱した文章と表現やメールの一文から相手の感情を読み取ろうとして悩む学生が増えてきた。

本学科での共同研究「入学前期の内面的変化から見る介護学生の特徴」¹⁾の中で、「取り立てて私のことを知ってほしいとは思わない」と回答した学生たちは、積極的に他者へ働きかけることをせずに親密な友人関係を形成することを避ける傾向にあることがわかった。

このように対人関係の中で表現力に乏しく、表現することを躊躇する学生が年々増加傾向にある。こ

うした学生の変化に先んじて、教員の関わりを多くし、生命について考えたり、感性や考える力をつけていこうと2年前に本学科のカリキュラムを改正した。本学では平成17年度に看護学科が開設され、歴史深い幼児保育学科との3学科体制になったことも影響しているが、3学科共通の科目を設定した。3学科に共通する「基礎・教養科目」は、本学の「教育理念」である「生命(いのち)・可能性・権利を保障し、そのひとらしい生活を支える“ケアスペシャリスト”の育成」のため、その基礎としての豊かな人間性を培い、総合的判断力を養うことを目標としている。3学科の教育連携を図り、幅広い視野をもち社会の期待に応えることができる人材の育成と、豊かな感性を備え、人への深い関心をもち、いのちの尊重と個人の尊厳を護り、信頼関係を築くことができる人間教育を目指すものとした。

カリキュラムを改正してから2年間を経過したところであるが、本学科の取り組みを紹介するとともにその効果を検討した。

1. 目的

学生の変化により、教員の関わりを多くし、いのちについて考え、感性や考える力をつけていくことを目的とした取り組みの紹介と取り組んだ内容の効果を検討する。

2. 基礎・教養科目の特徴

介護福祉学科・幼児保育学科・看護学科の3学科共通の柱立てを行った。その中で基礎・教養科目は、「ひとのいのちと健康を考える」「ひとの可能性を考える」「ひとの権利を考える」「ひとの生活を考える」

「学修の基礎能力を培う」の5つの群から構成することにした。この5つの柱を各学科とも大切に、共通の科目や独自の科目設定をした。本学科においては、以下の科目を設定した。

領域	ねらい	科目名
「ひとのいのちと健康を考える」	ひとのいのちの根本問題について考え学び、ひとの体のしくみと働きを理解し、健康的な生活をおくるための、運動の基礎理論と実践を学び、いのちの尊重と尊厳を理解する。 豊かな人間性を持った人材の養成を目指した教育を行う。	いのちと健康 生命倫理 体のしくみと働き 健康と運動
「ひとの可能性を考える」	人間の心と行動の基礎を学び、人間の行為の原理を理解し、いかに表現して伝えるのかを考える。ことば・造形・音楽・身体という様々な表現方法をつかって、自らの思いや考え方を伝えられ、豊かな人間関係が築けられる人材の養成を目指す。	人間の心と発達 ことばと表現 認識と行動 感性を高める表現
「ひとの権利を考える」	日常生活上や福祉関係の法律を学び、現代社会に対する解を深め、的確に対応できる判断力を備えた人材の養成を目指した教育を行う。	人権と福祉 市民社会と生活
「ひとの生活を考える」	人間と環境との共生への視点を養い「いのち」の尊厳について学ぶと共に、地域を構成する一員としての地域や暮らしから文化や歴史を考察し、地域社会の発展に貢献できる人材の養成を目指した教育を行う。	生活科学 地域生活交流 キャリア形成
「学修の基礎能力を培う」	英語表現や情報処理の基礎と技術を修得し、更に継続発展させ社会生活に生かすことができる基礎教育を行う。	英語表現 異文化間コミュニケーション 情報処理演習

3. 授業内容

1) 代表的な科目の授業内容

(1) 人間の心と発達

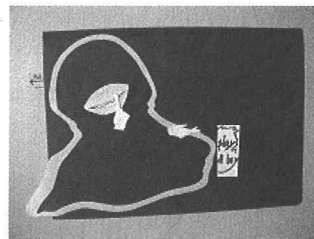
人間の心の仕組みや働きの法則性を学習し、人間の成長・発達と心理の理解を深め、対象者への個別的関わりに役立つような基礎的知識の学習をめざすことをねらいとし、心理学の基本的事項を理解し、人間の発達段階ごとの特徴を知る。また、実践で重要な援助技術について学ぶ。

(2) 感性を高める表現

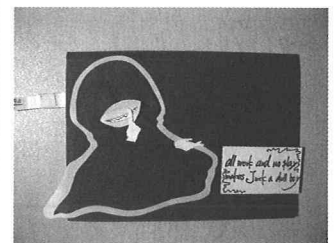
<造形表現> <音楽表現> <身体表現> について、実技を通して豊かな感性や表現する力を養う。また、介護現場においてその利用者の状態に合わせて活用できる教材や指導法について学び、実践できるようになることをねらいとする。

<造形表現>

紙を切ったり折ったりして、紙の可能性を見つけ、立体的なカードづくり、土粘土で日用雑器を製作する。

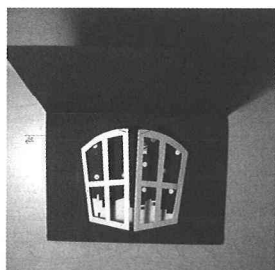


魔女？シー！

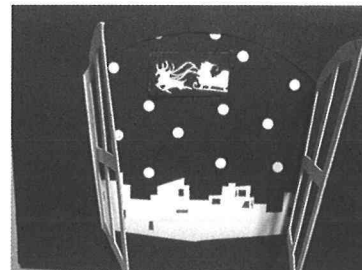
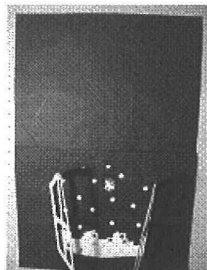


カードが入っています

All work and no play Makes Juck dull boy.



カードを開くと窓が開く



横を引くとサンタクロースが出てくる



<音楽表現>

高齢者の音楽療法、音楽の基礎知識、高齢者に喜ばれる選曲の方法、童謡・わらべ歌の伴奏付け、ボディパーカッション、楽器とのアンサンブルを考え、合奏する。

<身体表現>

童謡、唱歌、流行歌などに身体振り付けをつける、機能回復などを視野に入れた高齢者向け手遊び、パネルシアターやOHP



などを使う作品作りをして劇発表をするなどといった内容で、仲間と協力し合いながら作品を作り仲間と表現する喜びを感じるものになっている。

<音楽表現>

高齢者の音楽療法、音楽の基礎知識、高齢者に喜ばれる選曲の方法、童謡・わらべ歌の伴奏付け、ボディパーカッション、楽器とのアンサンブルを考え、合奏する。

(3) 生命倫理・いのちと健康

人間の生命に対する基本的理念及び倫理観を育成し、その考え方や価値観を明確にする。

いのちにまつわる様々な事例や体験記などから生命倫理について考える、生命の誕生と人工妊娠中絶から生命倫理について考える、神経難病患者の生き方のVTRから生きることについて考えるなどの内容になっており、学生は真摯に生きること、いのちの尊さについてグループワークしながら学ぶことができる。

黒・赤・ピンク

手話



(4) キャリア形成

キャリア形成としては、アクティビティコース・手話コースを設けている。アクティビティコースでは、絵手紙や折り紙を使った壁飾りなどの創

作活動を中心に行い、実習におけるアクティビティ活動に役立てることができるようにする。手話については一通りの自己紹介や挨拶ができるまで指導をしてもらっている。

(5) 基礎研究演習

学校生活を送る上で他者理解を促し、仲間つくりと生活体験を重ね、豊かな人間性を養うことができるようにする。少人数の学生を教員が担当し、ゼミ形式をとりながら学生一人ひとりの生活支援と花壇つくり、ボランティア活動、昔の遊びなどを学習し発表会をもち、表現することを大切にしている。そして地域に開かれた学校にしていくための交流会を開催する。

<花壇つくり>

学校内で花を栽培する目的を明確にし、学校探索も兼ねて花を植える場所や何を植えるかなどの計画をゼミごとに立てて実施する。



<ボランティア活動>

ゼミごとに学校周辺の施設にボランティアに行く計画を立て、施設と連絡を取り合い実施する。



その後ボランティアで学んだこと地域の人たちを講師にしてつけ方を習い感じたことを発表する。

<地域交流(梅つけ)>

地域の漬物つくりをするために、信州で6月の時期行われる梅漬けをすることにし、いろいろな漬け方があるので、一緒に漬けることをした。



その後梅の試食をかねて、地域の方をご招待して地域の伝統食である「おやきを」つくり、歓談する。

4. 授業内容の効果の検討

1) 調査方法: 介護福祉学科1年50名、2年74名を対象に、平成20年7月下旬、講義時間中に自己製作した質問紙を使用し調査する。調査協力は自由であり、成績に不利益を及ぼさないこと、得られた結果は本研究のみとすることを口頭及び文書にて説明し調査協力を求める。

2) 調査内容:

- 1.入学時より自分自身を表現できるようになったか(できる・以前よりできる・変わらない・苦手である)
- 2.入学時より自分の言いたいことが言えるようになったか(できる・以前よりできる・変わらない・苦手である)
- 3.自己を表現するのに役に立ったか(大いに役に立った・まあまあ役に立った・あまり役に立たなかった・ほとんど役に立たなかった)
- 4.どのような影響を与えられたか(自由記載)

3) 分析方法:1~3は度数毎にまとめる。4の記述については同じ内容毎にまとめ、まとめたものをフ

ローチャート式する。

4) 調査結果:回収率 1年98.0%(49名)、2年94.6%(70名)であった。

(1) 入学時より自分自身を表現できるようになったか。(図1)

1年ではできる3名(6.1%)以前よりできる25名(51.0%)であり、変わらない16名(32.7%)苦手である3名(6.1%)無回答2名であった。2年生では、できる10名(14.3%)以前よりできる36名(51.4%)であり、変わらない14名(20.0%)苦手である9名(12.9%)、無回答1名であった。

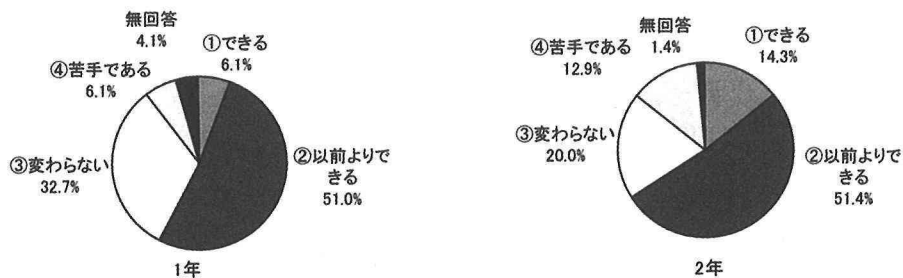


図1 入学時より自分自身を表現できるようになったか

(2) 入学時より自分の言いたいことが言えるようになったか。(図2)

1年では、できる6名(12.2%)以前よりできる28名(57.1%)であり、変わらない11名(22.4%)苦手である

ある2名(4.1%)無回答2名であった。2年生では、できる18名(25.7%)以前よりできる29名(41.4%)であり、変わらない12名(17.1%)苦手である10名(14.3%)無回答1名であった。

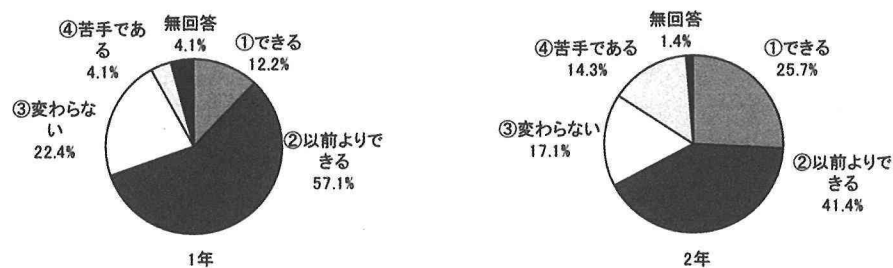


図2 入学時より自分の言いたいことが言えるようになったか

(3) 自己を表現するのに役に立ったか。(図3)

1年では、大いに役に立った7名(14.3%)まあまあ役に立った30名(61.2%)であり、あまり役に立たなかった7名(14.3%)ほとんど役に立たなかった3名(6.1%)無回答2名であった。2年生では、大いに役に立った8名(11.4%)まあまあ役に立った35名

(50.0%)であり、あまり役に立たなかった15名(21.4%)ほとんど役に立たなかった11名(15.7%)無回答1名であった。

半数以上が入学時より自分自身を表現でき、自分の言いたいことが言えるようになり、自己を表現するのに役に立ったと思っていることがわかった。

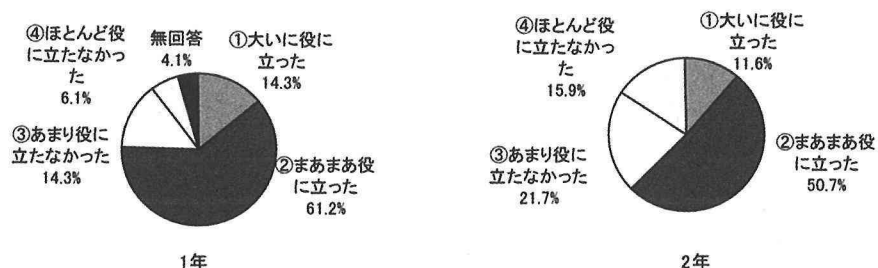


図3 自己を表現するのに役に立ったか

(4) どのような影響を与えられたかは、「感性を高める表現」「生命倫理」「いのちと健康」「キャリア形成」について1年生43名 2年生53名の記述があった。

①「感性を高める表現」(図4)

「作ること」はこんなに楽しいとは思わなかった。」など『作ること』によって、『楽しさ』を感じ『リフレッシュ』でき、講義だけでは学べないことが学べた。それは直接口に出さなくても、『物事は表現できる』ことを知り、年齢や性格を超えて『介護現場でも役に立つ』事となる。作ることによって、相手との意思の疎通ができるようになり、『コミュニケーションが取れる』ようになったと感じた。『コミュニケーションが取れる』ことにより、以前に増して『物事を表現できる』ようになった。

また、「周りの人と合わなくても普通に接することが出来るようになった。」「人それぞれの個性があ

って、えっと思うのもあったけど、その人の性格がよくわかった。」「自分の知らないものが見えてきた。」「自己表現する中で自分の知らなかった面に気づけた。」「一人ひとりの個性は大切だと感じた。」「個々の特性を見つけ出すことができ、相手の考え方がすごくわかるようになった。」など、『物事を表現する能力(感性)は人それぞれ』であり、『他人と違っていても当たり前として考えることができ、自分の中にあるものに気づき、他人のみえなかった部分に気づけ、『自分らしさがあってもよい』ということがわかった。これは、自分の中にあるものに気づき、また他人のみえなかった部分に気づけ、個性として理解できるようになっていると考えられる。

個性の理解は、自分への自信につながり、その自信は、さらに「物事を表現できる」ようになったと考えることができる。

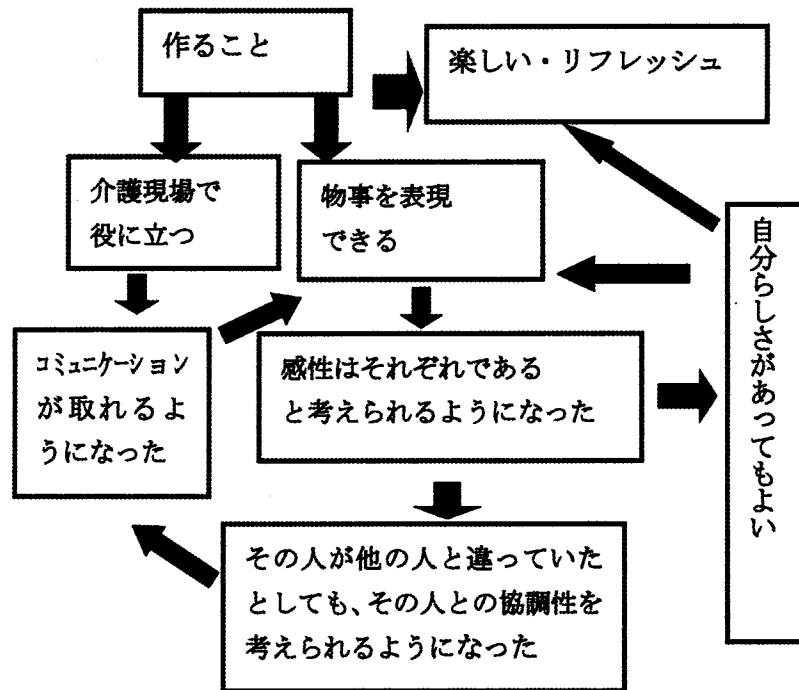


図4 1年「感性を高める表現」

②「生命倫理」「いのちと健康」(図5)

『今までいのちについて考えたことが無かった』学生が、自分のいのちも含め『いのちの大切さ』がわかった』と感じている。それを感じたことで、『自分のいのちは何でも良いと思っていたが死にたくないと思えるようになった』『苦しいのは自分だけではない』と、がんばって生きようと思えるようになり、『生きていることを大切に必要性』を感じることができるようになった。自分のいのちの大切さは『他人のいのちの大切さ』でもあることに気がつき、

第三者へ思いをはせることができるようになった。第三者へ思いは『人に対する優しさ』であり『その人の欠点も良いところも受け入れていくことが大切だ』と思った。同情するのではなく、思いやることが大切』ということに気がつくことができた。

また、いのちについて考えることができたことは、今『自分がどれだけ幸せ』であるかを感じ、『生きていることは当たり前ではなく、一人では生きていけない』ことに気づき、それが家族への感謝や人に対する優しさへとつながっていったと考えられた。

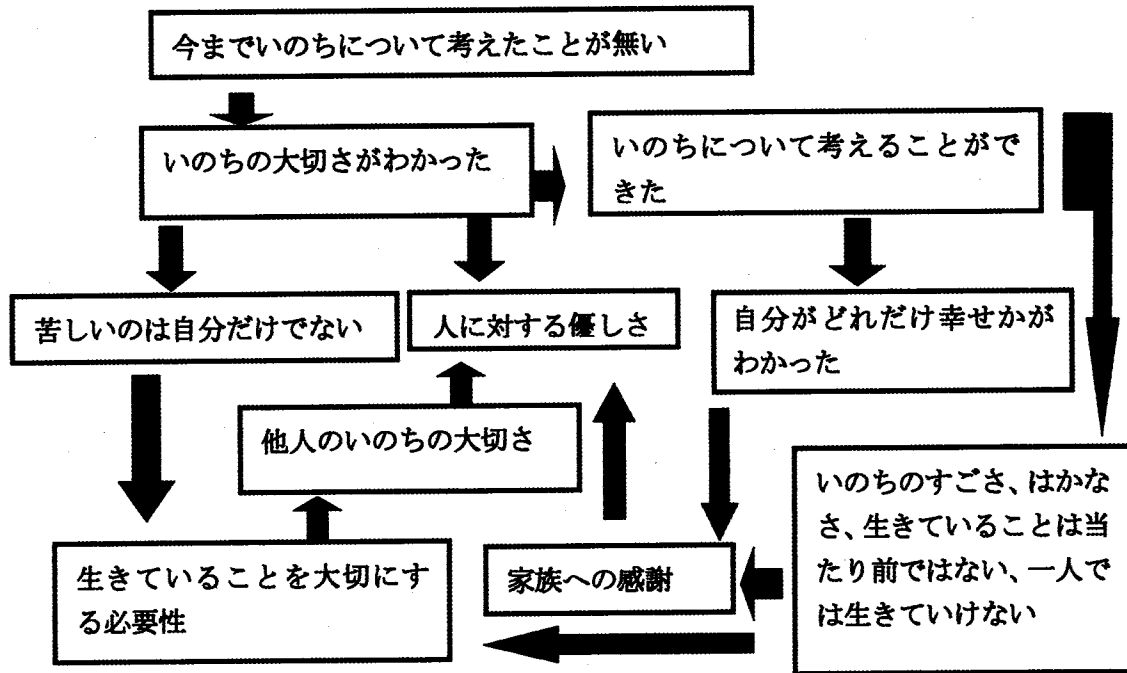


図5 1年「生命倫理」「いのちと健康」

③「キャリア形成(手話)」

「障害のある方とコミュニケーションをとりたい」「障害者と交流をしたい。」「また施設にも行ってみたい」と「手話を学び世界が広がり今までコミュニケーションがとれなかった方との交流を図りたい」という気持ちが芽生えており、興味が広がり学ぶ意欲につながっていると考えられる。(4項目のみのためフローチャートは作らず)

5. 考察

1) 授業内容の効果

5つの柱立ての基に行っている講義内容が学生にどのような影響をあたえているか明確にすることは難しい。しかしカリキュラムの影響を学生の声の中から拾ってみて、いのちの尊さや思いやりや、個別性が理解でき、生きることの力となり、自分を表現できるようになっていることが分かり、それなりの手ごたえを感じた。

立原²⁾は「表現＝伝達の契機を意識した他者性、さらには社会や文化との関係において自己の個性が、析出されてくることが窺われる。」と述べているように、表現することは個性の表れでもある。講義だけでは学生の個性や能力を知ることはできず、感性を高める表現等の科目を入れたことにより、学生の個性や能力を引き出すことができ、またそのことが学生の自信につながるようになったと考えられる。土川³⁾は「人前で発言することに自信がなく躊躇しやすい学生にとっては『ラベルに意見を書くこと』『自分が書いたものに説明責任を負うこと』は討論に参

加するきっかけとなり、自分の考えや感情を他者に理解してもらうための表現方法を身につけていくことの重要性に気づいているともいえる。(一部要約)」と述べている。積極的に他者へ働きかける事を苦手とする学生にとって、方法は様々であるが少しでも個性を表現できることは自信につながることになる。

生き生きと自分を表現できることで学生たちは友達とのつながりを深めたり、学ぶ意欲につながっていった。いのちについて考えその尊さに気づき、人に対する思いやりを持つことができるようになった。また人はそれぞれであって、個別性で自分らしさがあって良いという気づきが、他者をも認め受け入れていくことにつながっていったと考えられる。今までのいのちについて考えたことがない学生たちが、真剣にいのちについて考え、その尊さに気づき、第三者である人に対する思いやりをもつことができるようになったと考える。加瀬田⁴⁾は「『自分と同じような、あるいは自分とは異なる』複雑な存在としての他者へ目を向けることになったことは、『自己理解』と『他者理解』は絡み合いながら進行していたと考えられる。(一部要約)」と述べているように、個別性で自分らしさがあって良いという気づきが他者をも認め受け入れていくことにつながっていったと考えられる。

2) 教員の関わり方

学生の能力を引き出して、感性を高めて考える力をつけていくためには、教員が学生に深く関わるのが重要である。榎野⁵⁾は「現場職員や、大学教員が

本人の存在や工夫、あり方を肯定し受け入れているという実感が学生の中にある時、学生はより積極的に活動し意欲的に実習活動に参加すると考えられる。」と述べている。基礎研究演習は少人数でゼミ形式をとり、学生達の計画に沿って行われ、梅づけ、おやき作り、花だん作り、地域の人との交流、ボランティアなどの活動では教員が学生と共にこれらのことを行ってきた。実習や講義とは異なり、教員は、より学生の存在や工夫、あり方を肯定し受け入れられる関係性が得られたと考えられる。

また松本⁶⁾は「大学生が考える大学教員の対人魅力」の中で、「大学生が最も重視するのは教員の『個人的親しみやすさ』であり、気軽に話しかけやすくフレンドリー、また学生の立場に立って親身に話を聴いてくれて、気遣いのできる教員を望んでいることが示唆された。(一部要約)」と述べている。講義を離れ一緒に生活体験をすることで、教員の個性が表れ、親しみを覚えると共に、個性にふれることで人間関係ができていく。

教員の関わりによって学生の持っている能力、感性を引き出すことにつながり、学生自身の個性に気づき人間関係を円滑にしていくことができたと考える。それにより学生は仲間作りができ、人間関係構築の基礎を形成することになったと考える。

6. まとめ

学生の感性を高め考える力をつけていくためには、教員の関わりが重要であり、その関わり方によって学生の能力が引き出されてくる。教育理念に基づくカリキュラム作りが重要になることが分った。

来年度カリキュラムは、5群の柱立ての効果を生かし、これを基に立てた。

謝辞

作品の提供やアンケートに協力していただいた学生の皆さん、また授業参観をさせていただいた諸先生に感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 赤沢昌子他:入学前期の内面的変化から見る介護学生の特徴 松本短期大学紀要 17 p98
- 2) 立原恵一:図画工作・美術科学習指導要領の論理性とその美術教育観 宮城教育大学紀要 第42巻 p112 2007
- 3) 土川洋子:学びの自覚化に及ぼすグループワークの効果ー介護実習指導におけるグループワークからの一考察ー 白梅学園大学・短期大学紀要 43 p22 2007
- 4) 加瀬田暢子:新入看護学生に対する「中間づくり演習」の評価ーエンカウンターとリフレクションの概念を取り入れてー 南九州看護研究誌 vol.5 No.1 p7 2007
- 5) 榎野葉月:社会福祉援助技術現場実習における実習生へのサポートに関する調査研究 人文学報 No,379(社会福祉学23) p68
- 6) 松本淳子:大学生が考える大学教員の対人魅力 文化女子大学紀要 人文社会科学研究 p163 2008